

小橋 真司 岡部 大輔
森本 明浩 西村 健吾
山岡 正和 八井田 豊
倉迫 敏明

産婦人科

登村 友里 白河 伸介
牛尾 友紀 番匠 里紗
平田 智子 西条 昌之
中山 朋子 中務日出輝
小高 晃嗣 水谷 靖司

4東病棟・MFICU

山田 由貴 渕野 美緒
井澤 依里 宮原奈々子
菊本 牧子

分娩時の痛みは、多くの女性にとって生涯で経験する最も強い痛みとされている。欧米での無痛分娩実施率は高く、近年は本邦においても分娩時の和痛を希望する妊産婦が増加している。当院では麻酔科医主導のもと、2016年から硬膜外無痛分娩を実施しており、症例数は2017年2例、2018年8例、2019年15例（11月末時点）と増加傾向にある。硬膜外無痛分娩は高い鎮痛効果と母児への安全性から広く実施される方法であるが、その分娩管理は必ずしも容易ではない。これまで多職種での勉強会や症例毎の振り返りを行うことで、硬膜外麻酔の開始時期や薬剤投与方法、モニタリング方法を見直してきた。現在の問題点としては、硬膜外麻酔による子宮収縮抑制・娩出力低下に伴う分娩遷延や、吸引分娩率の上昇が挙げられる。夜間休日の対応にも制限がある。安全で質の高い無痛分娩を提供するため、多職種の連携が必要である。本研究会では、現在の状況と課題について報告する。

7. 外来化学療法センター増床に伴う薬剤師業務の変化

薬剤部

三葉智絵美 島田 健
中村 祥敬 江本 文代
大里 勇二 上野 聖子

中村進一郎

<背景>

2018年11月より、外来化学療法センターが20床より31床に増床となった。増床に伴う薬剤師の業務量の変化を比較検討することとした。

<方法>

外来化学療法室での化学療法施行件数（抗癌剤混注件数）、がん患者指導管理加算ハ算定件数、疑義照会件数を

・増床前1年間：2017年11月～2018年10月

・増床後1年間：2018年11月～2019年10月

の各1年間について集計した。

<結果>

増床前 → 増床後 の件数は以下の通りであった

・化学療法施行件数：7964件/年→8985件/年

・がん患者指導管理加算ハ算定件数：656件/年→801件/年

・疑義照会件数：53件/年→104件/年

<考察>

病床数の増加に伴い、薬剤師の業務も拡大していることが分かった。特に疑義照会件数の増加は顕著で、がん化学療法に薬剤師が積極的に関与し、薬剤の適正使用に職能を発揮していると考えられる。今後は医療の質への貢献についても評価していきたい。

8. 学生の社会人基礎力を高める取り組み

—生活全般に活用できる行動指標の検討—

姫路赤十字看護専門学校

神戸真由美 小野 真弓
内海 尚美 山田 道代
松井 里美 藤田美佐子
中林 朝香 藤元由起子
八幡 宏美 石谷 尚美
木本菜見子 森下 裕子
坂本佳代子 柳 めぐみ

2006年に経済産業省が打ち出した「社会人基礎力」は、「職場や地域社会で多様な人々と仕

事をしていくために必要な基礎的な力」と定義され、人を対象とし、チームで業務を遂行する看護職にも求められる能力である。看護基礎教育では専門職の育成を目的としており、技術だけではなく、社会に適応できる能力を育成する必要がある。

当校では2015年より、臨地実習の態度評価に「社会人基礎力と行動指標」を取り入れ、社会人基礎力の育成を行っている。しかし社会人基礎力は、実習だけで身につくものではなく、学生生活全般でも身につけていくことができると考える。そこで今回、「実習以外の学生生活場面での望ましい姿・行動」について、「4つの能力・13の能力要素」にカテゴリ分けし、教職員が期待する行動指標を検討した。

看護基礎教育における、社会人基礎力の育成に向けての取り組みを報告する。

9. キャリア開発ラダー導入の経緯と改訂に向けて

看護部

○柴田由美子 駒田 香苗
太田 加代 芦田真知子
若松 良子 田内千恵子
高原 美貴 藤井 育枝
世良 優子 飯塚 綾子
三木 幸代

当院看護師は、組織の一員として赤十字の理念に基づいた看護を提供し、医療の質の向上につなげることを目指している。そのような人材育成の一助として、2004年に日本赤十字社の継続教育システムであるキャリア開発ラダーを導入した。これは、看護実践能力の到達目標をレベル別に明示し、教育計画も含めた看護実践能力の向上のためのしくみであり、段階をふまえた能力開発が可能となる。また、評価会を用い、個々がこれまでの看護実践を振り返り、今後専門職として進むべき方向性や、学習計画について明確にすることを支援している。現在、静脈注射認定等と連携し、実践者・管理者・国際領

域合わせて620名が認定されている。

更に、医療の取り巻く環境が変化中、視野を地域・グローバルに広げ、多様化の時代に柔軟に対応できる看護師の計画的育成と継続した能力開発が必要となっている。それに沿ったラダー改訂が行われ、2020年4月からの導入に向けて準備を整えている。

10. 新生児緊急コール体制の確立について

総合周産期母子医療センター

○村尾 由花 圓田 友美
齋藤 知子

総合周産期母子医療センターである当院は、常時母体及び新生児の搬送受け入れ体制を有し、母体の救命への対応、ハイリスク妊娠に対する医療、高度な新生児医療等の役割を担っている。また一方では、医療的介入の必要がない新生児は出生早期から母子の愛着形成や育児技術習得のため母子が同じ部屋で過ごす母子同室の環境を整えている。

日本周産期・新生児医学会の「母子同室実施の留意点(2019年9月)」には、「母子同室を実施するにあたっては、新生児蘇生法プログラム(以下NCPR)を習得したスタッフを配置する。急変時に蘇生をする場所をあらかじめ定めておき、蘇生に必要な物品を準備する。急変時の緊急コール体制を決める。」と記載がある。NCPRの習得は、医師・助産師・看護師が習得し各部署に配置しているが、緊急コール体制の規定は定めていなかった。そのため、新生児緊急コール体制として、「新生児コードブルー」を確立したため、院内周知も兼ねて報告する。

11. 浸潤傾向が強かった虫垂腺扁平上皮癌の1例

外科

金平 典之 高橋 利明
野木 祥平 山内 悠輔
半澤 俊哉
坂本 修一 國府島 健